

Title	インドネシアの古代歌謡「パントウン」について： ＜我が国古代歌謡との比較研究＞
Author(s)	中西, 龍雄
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.211-p.220
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80472">https://hdl.handle.net/11094/80472</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# インドネシアの古代歌謡「パントゥン」について

## ——〈我が国古代歌謡との比較研究〉——

中 西 龍 雄

### Tentang "Pantun," Ikatan Puisi Lama Indonesia

#### ——〈Penyelidikan perbandingan dengan ikatan puisi lama negeri kita〉——

Ryuo Nakanishi

Di antara puisi lama Indonesia terdapat pantun sebagai satu-satunya ikatan puisi asli bangsa Indonesia. Selaras dengan itu, terdapat pula gurindam, ikatan puisi berasal dari Tamil dan syair, ikatan puisi dari Arab. Penyelidikan pantun di antara ikatan-ikatan puisi tsb. bermaana yang sangat dalam, berlainan dengan kedua jenis ikatan puisi lainnya, disebabkan karena pantun berandung fakta-fakta yang sukar sulit untuk dibereskan, sedang ia bertalian pula dengan ikatan puisi lama negeri kita, hal mana belum diketahui orang.

Dalam disertasi ini terlebih dahulu saya menerangkan pantun, ikatan puisi lama Indonesia tentang seluk beluknya seperti asal usul, tempat menangkis pantun, pandangan belakang dalam masyarakat, pembentukan dan perkembangan, teori dan cara, seraya mengeritik uraian-uraian penyelidik pantun sekitar hubungan tiap-tiap dua baris muka dan belakang yang sampai sekarang masih belum dijelaskan dengan pasti baik dalam kalangan sarjana Indonesia maupun dalam kalangan sarjana Eropah.

Setelah diselidiki garis-garis besar dan titik soal dari pada pantun sebagai tersebut di atas, maka dengan berdasarkan pengetahuan khusus yang diperoleh dari penyelidikan itu saya memperbandingkan pantun, ikatan puisi lama Indonesia yang dilagukan dengan ikatan puisi lama negeri kita yang dilagukan untuk menuntut persamaan sifat dan cara yang terdapat di antara kedua jenis ikatan puisi lama tsb. Dalam penyelidikan perbandingan ikatan-ikatan puisi lama itu telah saya berhasil membuktikan adanya fakta-fakta pertalian dengan Indonesia dalam ikatan puisi lama negeri kita yang dilagukan. Dapat diterangkan bahwa adanya fakta Indonesia dalam ikatan puisi lama negeri kita tak pernah dijelaskan

dengan bukti, melainkan diduga-duga sahaja oleh beberapa sarjana yang berminat. Di samping itu saya menyelidiki pula perubahan puisi pantun lama dan yang modern, ditilik dari segi bentuk, kiasan dan iramanya untuk mengetahui aliran perkembangan pantun.

Dengan jalan demikian saya meninjau dan menyelidiki bekas perkembangan pantun dengan sebaik-baiknya, sehingga tujuan penyelidikan saya dapat terlaksana.

## は じ め に

インドネシアの古詩としてあげられるものには、固有詩 pantun のほかに、外来詩 gurindam (タミールより由来) や syair (アラビアより渡来) などがある。このうち謡われる古詩 pantun の研究は、他の二種の外来詩と異り、極めて重要な意義をもつ。それは pantun それ自体について、明らかにしなければならない多くの問題を包蔵していることや、pantun はその原理や様式において、我が国の古代歌謡と極めて深いつながりがあるからである。

この小論においては、インドネシアの古代歌謡 pantun の起源、「場」と社会的背景、形成と発達、概念と様式、その他従来より指摘されているが、明確な解明がなされていない前詞と本詞の関係をめぐる pantun 研究家の諸説を展開し、批判する。これら pantun に対する概念や様式が把握され、問題点が浮彫りにされたのち、それによって得た基礎的な知識のうえにたつて、この研究課題の核心をなすインドネシア古代歌謡と、我が国古代歌謡の類似的性格を探求し、未だ推測の域を脱していない我が国古代歌謡における南方系要素（インドネシア系要素）の存在を、多くの例をもって立証する。それと共に古代歌謡 pantun を現代詩としての pantun と対比した場合、その様相、内容にどのような変化が見られるかを考察するなど、多くの視点から pantun 発達の跡を考えたい。

## ——本論文と表記法の改正について——

インドネシア共和国では、八月十六日法令をもって表記法を改正した旨、同国大使館ならびに消息筋より通報をうけた。それによると改正された部分は、概略次のとおりである。

1) 新綴字    j     y     ny    sy    c     kh

旧綴字    dj    j     nj    sj    tj    ch

2) 前置詞 di, ke は、これに接続する語と切離して書く。インドネシア語表記法の改正に伴い、この小論も新表記法によることにした。

マレーシアにおいても、従来の表記法を廃止して、上記新表記法による旨、マレーシア政府により同時に公表された。

## 古代歌謡 Pantun の起源

古代の人々は、自然およびそのうえに展開される現象や人間の営む生活に対し、種々の映像や感動を心の中に描いた。その原初形態は、どのようなものであったかを推測することは困難である。おそらく、それは刹那的な感動の表現であったものと推測されるが、それが、やがて歌謡として表現され、後世に伝えられた。これが、いわゆる伝承文学である。しかし、言い伝えられる間に、変化や新しいものがつけ加えられたことも否めないであろう。

インドネシアでは、伝承文学は *sesomba* 〈韻文〉からはじまり、その後、次第に *bidal* 〈諺〉や *pantun* 〈四行詩〉に及ぶ。文学の発生期という観点からすると、伝説や説話に先だって口誦や記憶に容易な一定の形式と、音律をもって謡われる *pantun* があり、それが彼等の民族社会を反映した最古の歌謡と考えられている。しかし、彼等の社会にはこの *pantun* とならび、その社会の様相に応わしい比喩や諷刺を表わす短文があったことを忘れてはならない。この短文は纏った理念をもつばかりでなく、韻を含んでいるので *bidal* と呼び、*Simorangkir* や *Simandjuntak* は、これを歌謡の範疇に入れている。*bidal* は一般的には、種類のうえから区別されないが、“Balai Pustaka” から出版された *Sutan Mahdun* と *B. Dt. Seri Maharadja* の編輯にかかる“*Bidal Melaju*” 〈マレーの諺〉において、*bidal* というのは、*peribahasa*, *pepatah*, *petitih*, *tamsil*, *ibarat*, *perumpamaan*, *pemeo* などを含むものであると述べている。これは恰も我が国で「諺」という場合、その中には言葉の比喩で面白く諷刺し、民衆に覚えやすくさせるものと、もっぱら人間のまもるべき道徳律を教える格言や金言などが、含まれるものがあるのと同じである。

*Pantun* にしても、*bidal* にしても、いつ誰がつくり、どのような経路を経て現在まで伝承されてきたかを知することは、不可能である。インドネシアでは、伝承文学が文字をもって表記されるようになったのは、アラビア文字がペルシアを経て、スマトラ北端のパサイに齎された十三世紀末以後のことである。それでは、インドネシアには文字がなかったかということ、決してそうではなかった。それを立証するものとして、南部スマトラの *Kedukan Bukit* (683年記銘) や *Talang Tuwo* (684年記銘) などのほかに、*Telaga Batu* (685年記銘)、或は *Karang Brahi* (686年記銘)、さらにまた *Banka* 島の *Kota Kapur* (686年記銘) より出土した *Sjeriwidjaja* 王国の発展を象徴する古体マレー語の刻文、南部スマトラの *Rentjong* 文字、ジャワの *Kawi* 文字 (900—1400年)、中部ジャワ、*Kedu* 州の *Gandasuli* (877年記銘) から出土した古体マレー語のような文字の刻文、その他古代における若干の刻文をみても明らかである。しかしこれらの多くは、理解し難い断片的なものにすぎないので、それらの刻文をもって、その当時の文学の様相を想像することはできない。

*Pantun* はアラビア文字が渡来してからも、書かれた詩としてではなく、謡われる詩として発達したものであるので、記述文学としては、1450年頃の著作といわれる *Hikajat Radja-radja Pasai* 〈パサイ王物語〉にはもちろん、1500年前後の作品といわれる *Hikajat Hang Tuah* 〈ハング・トウアハ伝〉にも、*pantun* のような韻律をもった文章はみられるが、明らかに *pantun* と

いえるようなものは見当らない。G. H. Werndly は1736年出版の *Spraakkunst* 〈文法〉において、ギリシャ語やアラビア語の韻と、マレー語の韻をあらゆる角度から調べてみたが、同じようなものは見られなかったと述べている。同氏は韻に関しては、それらの言語の音節数によらないで、音節を構成する音の高低によることを明らかにしている。もちろん *pantun* という語はもちいていない。マレー語学・文学の研究家として知られている R. J. Wilkinson にしても、*pantun* という言葉は十六世紀のマレー文学においては、*perserupaan* 〈同じもの〉、*pepatah* 〈諺〉という意味でもちいられているにすぎないと述べている。

*Pantun* が記述文学としてはじめて現われた文献は、“*Sedjarah Melaju*” 〈マレー編年史〉で、その第九章の終りに、いわゆる *pantun* と呼ばれる四行詩が見られる。後世の史家によれば、“*Sedjarah Melaju*” は、おそらく1612年に Tun Seri Lanang により書かれたものであると言われている。しかし、そうであるからといって、その頃からはじめて四行詩 *pantun* が、見られるようになったという根拠は何もない。従って *pantun* は、それまでにはなかったとは言えない。それは、ただ口誦によるもので、記述文学として見られなかったにすぎないものと言えよう。

*Pantun* の起源について、Ch. A. van Ophuysen は一つの仮説をあげている。それによると、*pantun* はマンダイリング地方〈バタック族の居住するスマトラ北部〉においては、バタック語で呼ばれる “*ende-ende*” のようなもので、その起源を「葉ことば」の中に見出すことができる。マンダイリングの風習では、恋人と文通する場合、恋文の中に葉を入れておく。その葉は自分が言おうとする言葉と同じ意味をもつ名称のものをもちいる。例えば *sitangis* の葉をもちいて、*tangis* 〈泣く〉、*sitarak* の葉をもちいて、*tarak* 〈離れる、別れる〉、*sitata* の葉をもちいて *kita* 〈我々（相手を含む）〉などのごとき言葉の意味を表わす。ある意味と韻をもつ若干の植物の葉を配列し、若干の行（四行）へと発展させて一定の目的を表わす。こうしてできたのが “*ende-ende*” で、トバ・バタック語〈スマトラ北部トバ湖地方の住民により話される〉では、“*ende-ende*” というのは、*umpama* 〈譬え〉と同じで、*perserupaan* 〈同じもの〉、*pepatah* 〈諺〉などを意味する。インドネシア大学教授 Slametmulijana は “*Bimbingan Seni Sastra*” 〈文芸指導書〉において、ジャワでも *sirih* 〈きんまの葉〉と *pinang* 〈檳榔子の実〉が愛を結ぶために、もちいられていることを明らかにしているが、それは起源のうえからみると、*pantun* の中にも屢々謡われるように、愛を結ぶ「象徴」や「譬え」などの意味をもつものであると言えよう。

*Pantun* の起源と関連して、明らかにしなければならないのは、*pantun* という語の由来である。R. O. Winsted の “*A History of Malay Literature*” によると、*pantun* という語はサンスクリットと、同一語源であるジャワ語の *kromo* 〈上流階級用語〉に見られる *Pari* から由来する語である。*Pari* という語は *bhasya* 〈言葉〉の複数形で、その語根が配列するという意味をもつ *kromo* の *rik* に変った。すなわち *peribahasa* は言葉を配列するという意味をもつ語であると述べている。スイスの言語学者 Brandstetter は比較言語学の研究において、カウイ語における *pantun* の意味を *akarkata* 〈語源〉の重複によりできた *tuntun* 〈配列する〉から説明を試

みている。同氏によれば、スンダ語にみられる pantun〈比喩〉の akarkata は tun であるが、フィリピン諸語のうちタガログ語では, tonton は配列する。パパンガ語でも tuntun は配列する。ビサヤ語では, pantun は教育する。スマトラのトバ・バタック語では, 礼儀, 尊敬などを意味する。インドネシア語派において, これら主流をなす諸語における pantun の語源は, いずれも配列するか, 整える。またはそれと同種の意味をもつことがわかる。従って語源的な角度からみれば, pantun という語は「譬え」というより, むしろ「言葉を配列する」とか, 「整える」という意味の方が強いことが明らかである。このような語源的見地から R. J. Wilkinson や R. O. Winsted は Ch. A. van Ophuysen の pantun 起源説に対して批判的な意見を表明している。

Pantun はあとで述べるごとく, わが国の古代歌謡と同様, 掛合い歌の中から成立しているところよりみて, pantun という語には, 言葉を掛合うという意味があると考えることができる。言葉を掛合うためには, 複数の言葉が相互に応わしいものでなければならない。応わしいか, どうかは言葉を配列することによって判断することができるわけで, その根底には言葉を配列するという考え方が存在している。

このようにみえてくると, さきに述べた Ophuysen の「葉ことば」に関する仮説にしても, インドネシア語派における主な pantun の語源にしても, 更にはまた, pantun の掛合いという観点からしても, 言葉を配列するという思惟形式については, 軌を一にするものがある。このような事実よりして, pantun という語には, 「言葉を配列する」という基本的理念が潜在するものと考えられる。

### Pantun の「場」と社会的背景

Pantunについて考えるにはあらゆる視点において, それが生れた古代のインドネシア社会が, どのような制度や組織をもっていたかを知らねばならない。しかしそれがためには, 古代社会を創造した人たち, いいかえればインドネシア人の祖先は, いつ頃から, どのような経路を経てインドネシアに定着し, 現在のインドネシア社会の基盤を形成したかを考えることは, pantun の原理を考究するうえにおいて意味があるであろう。オランダの言語学者 Hendrik Kern (1833—1917) は, 論文 “Taalkundige gegevens ter bepaling van het stamland der Maleisch Polynesische Volken”〈マレー・ポリネシア民族の原住地決定についての言語学的論考〉において, マレー・ポリネシア海域に散在する島嶼に住む各種族の話す言語について, 主として動・植物を中心とした語彙を比較研究することにより, インドネシア民族の原住地を東南アジア大陸の海浜地帯に求めた。その後, von Heine Geldern は先史考古学上の立場から, 東南アジア大陸及びインドネシアにおける新石器時代の文化を象徴する方角石斧の分布状況について研究を進めた結果, その発源地は東南アジア大陸の雲南地方にあるという結論を下した。方角石斧を固有文化とする原インドネシア人はそこから出て, H. Kern がインドネシア人の故地とする印度支那東海岸及び西海岸に拡がったものと考えることができる。この推断は Kern の論文の中にもあるど

とく、インドネシア語の selatan <南> という語は、selat <海峡> に an が接尾されてできた語で、インドネシア人の祖先はマラッカ海峡の北方から来たことを表わしているという事実からも、その妥当性が立証される。方角石斧の分布状況よりすると、原インドネシア人は、さらにマレー半島を経てスマトラ、ジャワへと拡がった。また、ある少数のものは東南アジア大陸から、直接カリマンタン（旧称ボルネオ）へ渡ったことも考えられる。その民族移動は、植物が栽培され、農耕文化が発生し、収穫物を貯蔵するための土器がつくられるようになった新石器時代（紀元前数千年）において、集団をもって行われたことが、各種族の言語や風習のうえからみて、推測することができる。

インドネシアに定着したインドネシア人の祖先、原インドネシア人は新来の土地において、“desa” と呼ばれる村落を構成し、それが一つの単位となって現在にいたっている。その最も典型的なものは、ジャワに見られるが、それは単にジャワにのみ見られるばかりでなく、インドネシア全域にわたり見られる社会組織で、地縁的、血縁的紐帯による村落共同体構成の連帯的性格は極めて強いものがある。この社会組織は hukum adat <慣習法> を法的基盤とし、相互扶助の理念により支えられている。このような社会は共同体構成員の団結が頗る強固で、個人主義的な性格は見られない。生活に必要なものは精神的なものと、物質的なものとを問わず、すべてその社会でみだされる。従って外部に対しては閉鎖的であるが、内部においては親和的で、desa <村落> における住民は、稲刈のごとき農事活動はもちろん、宗教行事、その他の諸行事においても、常に gotong royong <相互扶助> という精神的要素を基盤として生活を営んでいる。その生活においては、農事はもちろんのこと、儀礼や娯楽にいたるまで協力を必要とするが、それは共同体意識乃至は自覚を強化するのに役立つものといえる。このようにして強化された共同体意識の中で育まれ、協力を必要とする娯楽の一つとして、殊に農事における慰安の「ひとこま」として、彼等の生活と結びついて生れたのが pantun である。農民の生活と結びついて pantun が存在していたということは、とりもなおさず収穫祭や饗宴がおこなわれた歌場が pantun の「場」になったものと考えられる。

我が国古代歌謡の権威として知られている同志社大学教授・土橋寛博士は、「うた」を歌謡と詩歌に分け、歌謡を民謡と芸謡に区別して、歌謡が民謡と区別される基準に歌の「場」を示されている。この基準はインドネシアの古代歌謡 pantun にもあてはまる。インドネシアの pantun が古代歌謡としての生命をたもつためには、うたの「場」を離れては考えられないわけで、古代歌謡としての pantun は、決して芸謡や芸能的な「場」、例えば、「ながし」のような「場」で生れたものではなく、前述のごとき村落共同体を構成する農民たちの「集い」の場であったことが、容易に想像できる。このような「場」でつくられた pantun は、単独の吟唱であったり、掛合いであったり、或は問答形式をとるものであった。もちろんその方法や種類は、多岐にわかれていたとおもわれる。あとで述べる現代詩としての pantun は、哀感や孤独をたのしむ詩人により創作されるが、古代歌謡としての pantun の場合は、すでに述べたごとく、“desa” で生活を営む住民の共通の「場」——収穫、饗宴など——でつくられるものであるから、pantun の歌い手は、同時に聞き手であり、周囲で見る人たちも単なる見物人ではなく、その場にとけ込んで

自由に歌い手にもなり、仲間にもなる。このような pantun の掛合いは、我が国の古代における歌の掛合いと類似しているものがあるといえよう。我が国の古代において行なわれた歌の掛合いは「歌垣」と畿内と呼ばれ、関東では「<sup>か</sup>耀歌」といったようで、本来、歌垣というのは収穫のあげられた秋に、作物の豊穡を祝う民俗行事であったとおもわれるが、これは古代インドネシアにおける pantun の掛合いがもつ意義とほぼ等しいものがある。古代においては、おそらく我が国で歌謡が謡われたときと同じように、pantun をうたう場合は、楽器を伴わず、咽喉より迸り出る声に、高低、緩急、抑揚などの曲節をつけてうたわれるが、ときには舞踊を伴うこともある。十三世紀末以後、アラビアから「レバナ」（タンバリンのような楽器）が齎されてから、その楽器で囃すようになった。しかし pantun の「場」は必ずしも、一定の形式が存在することを必要としない。ここに述べたのは、典型的な pantun の「場」の一つにすぎない。

Pantun の「場」でうたわれたものは、例えば男女の掛合いによる pantun は、もはや二人だけの共有物としての財産でなくなる。それは、pantun の「場」にいる人々も加わって創作されたものであるから、作者の名を必要としない。より詳しくいえば、pantun の目的が協力して為される作業の目的と、一致しているので、個人の存在を明らかにする必要性が認められないことによるものである。

ここで注意しなければならないのは、古代歌謡としての pantun が創作者の名を表わさない理由と、古インドネシア文学において、著作者の名を表わさない理由の相違である。さきに述べた "Hikajat Radja-radja Pasai" 〈パサイ王物語〉にしても、"Hikajat Hang Tuah" 〈ハング・トゥェハ伝〉にしても、著者の名を明らかにしていない。"Sedjarah Melaju" 〈マレー編年史〉も、著者はおそらく Tun Seri Ranang で、その内容や史実より推して、1612年に書かれたのではないかといわれている。これは古い時代のインドネシア社会にあっては、文学作品などは共同体の共有財産としてとりあつかわれ、著者や著作年月を明らかにしないということが、彼等の社会の掟になっていたことによる。このような慣習は、Abdullah bin Abdulkadir Munsji がマレー文学史上はじめてといわれる自叙伝形式の "Hikajat Abdullah" 〈アブドラ伝〉を上梓した1849年頃になってようやく終りをつげた。現在では、現代詩として詩人により創作された pantun はもとより、作家により創作された小説、随筆などの散文も、作者の名を明らかにしている。ただ、古代歌謡としての pantun については、pantun の「場」という特殊な事情もあるので、やはり作者の名は明らかにされていない。

### Pantun の形成と発達

古代のインドネシア社会には、すでに述べたごとく、bidal 〈諺〉と呼ばれる短文のほかに、pantun と呼ばれる歌謡が文学的要素に、音楽や舞踊などの要素が結びついて、完成された謡われる詩として存在していた。Zuber Usman は "Kesusasteraan Lama Indonesia" 〈古インドネシア文学〉において、また B. Simorangkir と Simandjuntak は "Kesusasteraan Indonesia" 〈インドネシア文学〉において、"bidal" より発達したインドネシア歌謡は pantun にいたって、



はじめてその構成のうえにおいて、一定の形式と韻をふむことになったと述べている。その意味において、pantun は bidal より脱皮した完全な歌謡といえるであろう。

Ch. A. van Ophuysen によると、pantun の一部にもちいられている peribahasa <諺> には、次のような句がある。

Sudah gaharu cendana pula.

これは <知っているのにまたたずねる> という意味の隠喩句としてもちいられている peribahasa で、直訳すると、<すでに白檀があるのに、伽羅もある> となる。白檀、伽羅はともに香木であることを思えば、この隠喩は何を意味するかが、容易に理解できる。この句の本来の意味を隠喩でない通常のインドネシア語になおすと、

Sudah tahu bertanya pula <すでに知っているのにまたたずねる> となる。

Kura-kura dalam perahu.

これは <知らないふりをする> という意味の暗喩句である。<舟の中の亀> という意味は、亀が舟の中で甲羅に身を潜めて、じっとしている様子を想像すれば、この暗喩句の意味がよくわかる。この句の本来の意味を解りやすいインドネシア語で表わせば、

Pura-pura tidak tahu. <知らないふりをする> となる。

上に述べた四行の短文を四行詩の形式に従って組立てると、次のような pantun ができあがる。

Sudah gaharu cendana pula,

Kura-kura dalam perahu,

Sudah tahu bertanya pula,

Pura-pura tidak tahu.

この四行詩は始めの二行を前詞、その次の二行を本詞とする pantun で、Sudah gaharu cendana pula <すでに白檀があるのに、伽羅もある> は peribahasa <諺>、Kura-kura dalam perahu <舟の中の亀> は暗喩句である。いずれも韻を含む素朴な短文で、本詞の比喩または隠喩（暗喩）としてもちいられている。第三行、第四行は本来の意味をもち、前詞の二行を合わすと、明らかに一首の pantun を形成するが、前詞を構成する二行の各々のみをもってしては、本詞の比喩または隠喩（暗喩）を含む短文にすぎない。しかし pantun の形式をとることにより、韻は一定の形式 a b—a' b' をふむこととなる。pantun の意味を理解するのに困難な大きな理由は、本詞の比喩または隠喩（暗喩）となっている前詞二行の諺または隠喩句を理解し難いか、さもなければ詩としての語句に表わすことが困難であることによる。もし前詞にもちいられている比喩または隠喩がすぐ理解でき、詩の語句として表現することが容易であるならば、他の現代詩と同様 pantun を訳するのに労を要しないであろう。理由はどうであれ、pantun は前詞二行が bidal または隠喩句（暗喩句）よりなる場合は、すでに述べたところにより明らかなごとく、諺や隠喩句の意味さえ知っておれば、本来の意味は自から理解できる。極端に言えば、本詞の存在を必要としない。このようにみると、pantun は bidal を基底として発達したものであるといえよう。

しかし、他方また、わが国の古代歌謡のように、単純素朴な形から発達したものであるという考え方も成立する。一行よりなる単文 *bidal* について単純な形といえば、二行詩 *couplet* になるが、*pantun* も最初は二行詩であったものが、より複雑な思想を表現し、音律や音調をより美しくするため、四行の形態をとることになったものであると考えることも、決して不自然ではない。このように考えることができる根拠として、*pantun* は二行詩から、四行詩へと隔行毎に脚韻を合わしながら改変し、それが更に、六行詩、八行詩、十行詩、十二行詩……へと発展させていくことができるからである。

二行詩は、通常、各行四語または三語からなり、一行目は前詞で、本詞の比喩または隠喩（暗喩）としてもちいられ、二行目が本詞で、本来の意味がある。二行詩は二語目または三語目に押韻するが、これは二行詩を四行詩に改変した場合における脚韻が *a b—a' b'* の形式になるようにするための必要な操作措置といえよう。このようにして、二行詩から改変されて生れた素朴な四行詩は *carmina* 〈略式四行詩〉または *pantun kilat* 〈略式パントウン〉と呼ばれる。最初の二行は前詞で、これに続く後の二行は本詞である。前詞は本詞の比喩または隠喩（暗喩）で、本来の意味は本詞にある。この基本構造の概念は、二行詩に見られたものと同一で、前詞と本詞の区別は *carmina* においては、脚韻により、二行詞の場合よりも、より明確な形で表われている。

*couplet* 〈二行詩〉が改変されて、*carmina* 〈略式四行詩〉になった例をみよう。

Dahulu parang, sekarang besi,

Dahulu sayang, sekarang benci

むかしは鉈で いまは ただの鉄

むかしは愛しく いまは うとまし

Dahulu parang,

〔比 喩〕

Sekarang besi.

Dahulu sayang,

〔歌 意〕

Sekarang benci.

Sebab pulut, santan binasa.

Sebab mulut, badan binasa.

餅がゆえ サンタン潰ゆ

口がゆえ 身が亡ぶ

注 サンタンというのは、椰子の実の殻の内側にある果肉を搾った乳液で、これを餅に混入すると、溶けてなくなる。

Sebab pulut

〔比 喩〕

Santan binasa

Sebab mulut

〔歌 意〕

Badan binasa

上例において明らかなように、前詞は本詞の比喩または隠喩（暗喩）であるが、前詞が *bidal* よりなる場合は、*bidal* を理解しているものにとっては、すでに述べたごとく、前詞だけで本詞はどのような句であるかがすぐ解る。これに反し、*bidal* の意味を理解しないときは、本詞との関連性を把握することは困難である。一般に比喩は *pantun* を美化する反面、内容の理解を困難にする場合が多い。（以下次号）